

グユクの教皇あてラテン語訳返書について

海老澤 哲雄

はじめに

一二四五年、ヨハネス・デ・プラノ・カルピニ修道士は教皇の使節としてモンゴルへ派遣された。その際、同修道士は教皇の書簡二通を託されている。一通はキリスト教への改宗を勧めたものであり、もう一通は軍事的侵攻をやめるようにもとめたものである⁽¹⁾。カルピニは、往路、ヴォルガ河流域のバトウの幕営で教皇の書簡を呈した。書簡はそこで翻訳され、カルピニがグユクのもとへ達したときにはその翻訳はすでに届けられていたという⁽²⁾。

カルピニの報告によると、グユクの教皇あて返書は次のようにして用意された。カルピニは帰国に先立って宮廷に呼びだされた。当初モンゴル側はモンゴル語の返書を翻訳するとき、宮廷に出入りしているもので処理できるルテニア語（スラブ系）かペルシア語かにするつもりだったようであるが、カルピニのもとめに応じ、ラテン

語に翻訳することになった。ラテン語訳が完成すると、さらにカルピニがとくに希望したわけではないが、書簡は「サラセン人のことばにしたため直した」、すなわち、そのころのリンガ・フランカであるペルシア語にも訳された。それは、「教皇が希望したとき、だれかそれを読めるものを近くで見つけることができた場合に備えて」という意味であった。グユクは、自らの使節をたててその返書をもたせ、カルピニらに同行させて教皇のもとへ届けることを考えていたようであるが、カルピニは、グユクの使節の同行をきらい、結局、託されて自身で携行することになった⁽³⁾。

カルピニが持ち帰ったグユクのペルシア語訳返書は、周知のように、その現物が二十世紀になってからヴァティカンの文書館で発見され、ポール・ペリオにより解読されて発表された。そのペルシア語訳には、ウイグル文字モンゴル語の玉璽が捺されていたことも判明した。ラテン語訳は現物が伝わっているわけではないが、数種類のテキストがいくつかの文書館に所蔵されている。カルピニが帰還した当時、教皇庁では両語訳のうち当然、ラテン語訳の方を読んで、モンゴル側の対応を認識したに違いない。その意味では後者の方が重要な役割を果たことになる。なおモンゴル語原典は今に伝わっていない。

カルピニが伝えている、モンゴル宮廷におけるラテン語訳作成の経緯から考えると、ラテン語訳はモンゴル語原典に忠実であるはずである。第一に、ロシア人通訳が介在しているとはいえ、モンゴル語原典から「一語一語 (de verbo ad verbum) 訳した」のであり、大意をとったのではないということである。第二に、モンゴル官人は、ラテン語訳が完成すると、なにか落ちがないかと、一度二度とラテン語訳を読み上げさせたことである。つまりモンゴル語に訳し戻させて内容を確認していることである⁽⁴⁾。これらの点を踏まえると、ラテン語訳はそれほ

どモンゴル語原典から離れることはないはずである。実際にラテン語訳の方がペルシア語訳よりモンゴル語原典に近いという説もある⁽⁵⁾。またペルシア語訳も当然モンゴル語原典に忠実に作成されたはずである。従って返書のラテン語訳とペルシア語訳とは内容的に重なり合っているもおかしくないが、実際には両語訳は決して瓜二つであるとはいえない。

筆者は、かつてグユクの返書について分析を試みた際、ラテン語訳がモンゴル語原典から離れていると推定される箇所が存在を指摘し、離れている理由として、モンゴル語原典からの重訳であること、当初の原稿を整理する過程で生じたことの二点をあげた⁽⁶⁾。しかし、両語訳を比較すると、右の理由だけでは説明しきれないように思われる。改めてラテン語訳について、モンゴル語原典を忠実に訳したものがどうか、グユクの教皇あてメッセージを正確に伝えていのかどうかについて、ペルシア語訳との比較を通して考察したいと思う。もし忠実でないとするれば、当然、いかにしてそうなったか、そのよって来たとくも究明する必要がある。

一 返書のラテン語訳とペルシア語訳

カルピニによって将来されたラテン語訳返書は、教皇あるいは教皇庁内部でのみ読まれたわけではない。カルピニに同行したベネディクトゥス修道士がケルンで行った口頭報告を記録したものの⁽⁷⁾と同時代人サリムベネ修道士の『年代記』中⁽⁸⁾に収められていることから考えると、公開されていたようである。ラテン語訳テキストは、右に挙げた同時代の記録のほかに、ルブリヤンによると、ヴァティカン、パリ、ウィーンの図書館にそれぞれ

れ一種、一種、二種の写本を感しているという⁽⁹⁾。右のうちヴァチカンの写本は上記の文献ものと同系統である。他のパリとウィーンのものとは表現上の異なるところがある。それはおそらくテキストを写した際に生じたものである⁽¹⁰⁾。

次にラテン語訳テキスト⁽¹⁰⁾からの試訳を上段に、ペルシア語訳テキスト⁽¹¹⁾からのものを下段に掲げる。説明の便宜上、それぞれアルファベットを付した。内容上、後者のA・B・C……は、前者のa・b・c……に対応する(ただしhとHを除く)。文中「」内は筆者の補足である。

ラテン語訳テキストの試訳

ペルシア語訳テキストの試訳

a 神の力により、万人の皇帝、大教皇に確かな本物の書簡を「届ける」。

A とこしえの天の力により、大いなる国全体の、海内のカン⁽¹²⁾、私たちの聖旨。これは、大教皇のもとに承知し理解するように届ける命令である。

b 私たちと和平しようと議したのち、教皇たるあなたとすべてのキリスト教徒は、使節を私たちに派遣した。使節自身より聞き、かつ書簡にもある通りである。そこで、もし私たちと和平しようと望

B 「あなた方は」協議を行い、服属の請願を届けてきた。これは、あなた方の使節より聞いた。しかしてもし自らのことばに忠実であるならば、大教皇たるあなたは、もろもろの国王たちと共に親し

むのであれば、教皇たるあなたとあらゆる国王と有力者は、和平を確立するために決して遅延することなく私たちのもとへ来るように。その際、私たちの回答と意向を聞かせよう。

c
あなたの書簡の内容に「あなたは洗礼を受けてキリスト教徒になりなさい」との一節が含まれている。これについて一言あなたに答える。どのようにしてそのことを行うべきか解らない、と。

d
あなたの書簡には、ほかに住民、とくにキリスト教徒、わけてもポーランド人、モラヴィア人、ハンガリー人の大量殺戮にあなたが驚いている旨が記されているが、私たちはあなたに、この件についてもまた解らないと答える。ただし、この件について全く沈黙して避けて通った、と思われないように、あなたに次のように答える。かれらは神の文書とチンギス・ハンとカガンの命令に従わず、大いなる会議を開いたすえ、使節を殺害した、そ

親しく私たちのもとに伺候すべきである。ヤサにある、あらゆる勅令をその際に聞かせよう。

C
また、あなたは、私をキリスト教に入れる、それがよい、と言っている。あなたは自ら賢ぶっている。あなたは願ひ出てきたが、その願ひ出は私たちには解らない。

D
また、「あなた方は、マジヤールとキリスト教徒の地域をことごとく奪った。驚いている。かれらに何の罪があるのか。私に言ってほしい」とあなたは申し立ててきた。あなたのこのことはも理解することができない。チンギス・カンもカガンも、二人とも神の命を聞かせようとして送り届けたが、かれらは神の命を信じなかった。あなたのことばと同様にかれらもまた尊大であった。かれらは傲慢に振舞った。われらの使節を殺した。

のために神はかれらを討滅するように命令を下し、「その実行を」私たちの手に委ねられたと。そうではなくて、もし神がそのように命令を下さなかつたのであれば、人はほかの人に対して何をすることができようか。

e さらにあなた方、西方の人々はただ自分のみキリスト教徒であると信じ、他の人を蔑んでいる。しかし神が恩寵をだれに垂れようとしているか、このことをあなたはどのようにして知ることができようか。

f さらに私たちは神を敬い、神の力により東から西に至るまで、全地上を滅ぼした。もしこれが神の力によるのでなければ、人は何をすることができようか。またもしあなたが和平を容れ、私たちに自分の軍隊を引き渡そうとするのであれば、あなた天皇は有力なキリスト教徒とともに和平を結ぶ

「そこで」かれらの地方や住民を、昔からの神が殺し滅ぼしたのだ。神の命によらないで、人はどうして自分の力で殺し、どうして捕らえられようか。

E また、あなたは次のように言っている、「私はキリスト教徒であり、神を崇め、……蔑む」と。あなたは、神がだれを許し、だれに恵みを施すか、をどのようにして知るか。あなたは、だれがこのようなことはを口にするのか、をどのようにして知るか。

F 神の力により、日の昇るところから日の沈むところまで、「神は」すべての領域を私たちに委ねた。私たちは「それを」保持している。神の命によらずに、人はどのようにして「そのようなことが」できようか。今やあなたは誠意をこめて「服します。お仕えます」といふべきである。あなた自

ために、決して遅れることのないように私たちのもとに来なければならぬ。そのとき、私たちはあなた方が私たちと和平しようとしていることを確認する。

g けれどももし私たちの神の文書に信をおかず、私たちのもとに来るようにという忠告に耳を傾けないのであれば、そのときは間違いなくあなた方が私たちと戦おうとしていることを確認する。その後には何が起るか、私たちには判らない。神のみがご存じである。

h キングス・カンは初代皇帝、第二代はオゴダイ・カン、第三代はクイクク・カン。

身、国王たちの先頭に立ち、ともども一つになつて私たちのもとへ臣従の礼に出頭すべきである。あなたの服属はその時に確認しよう。

G もし神の命を認めず、私たちの命令に背いたならば、私たちはあなたを敵と見なそう。このようにあなたに知らせる。もし従わなかったならば、それについて私たちは何を知っていようか。神がご存じである。

H 六二四年第二ジュマーダの最後の日。

二 ラテン語訳とペルシア語訳の主な相違点とその考察

1 まず返書の冒頭と末尾の一節を見ることにする。

モンゴル皇帝の発する文書では冒頭に、「とこしえの天の力により……」という定型的文章が置かれる¹³。全

体的にペルシア語訳A（冒頭の「とこしえの……われらの聖旨」の部分だけはトルコ語訳であるが）は、ほぼその定型句「とこしえ(mongke)の天の力により」の通りに記されているが、ラテン語訳aには「とこしえの」に対応する文言を欠いている。ラテン語訳aに見える「確かな本物の書簡」は、ペルシア語訳Aにはない。このように「確かな本物の書簡」であるとともに謳うことは、モンゴル皇帝の文書に例を見ない。もともとこれに対応する文言がモンゴル語原典にあつたとは考えがたい。なんらかの事情により加筆されたと考えられる⁽¹⁴⁾。

またモンゴル皇帝の文書の末尾には、いつ、どこにいる時に記したと、作成した日付と場所が記される。ペルシア語訳Hには、場所の記述を欠いてはいるが、日付はイスラム暦で記されている。それに対してラテン語訳の方は、末尾には場所も日付もともに欠いている⁽¹⁵⁾。

文書の冒頭と末尾に関する限り、ペルシア語訳A・Hの方がラテン語訳aよりモンゴル皇帝の発する文書の書式を残しているといえる。さきにもべたように、グユクの宮廷でラテン語訳を作成した時、その訳文を正確かどうか確認されている。従ってラテン語訳も少なくともペルシア語訳並みにモンゴル流の書式のあとが窺えてもおかしくない。しかし実際には右のようにそうなっていないのである。

2 次に本文を見してみる。ペルシア語訳に見える文言は、ラテン語訳でも同じ意味のことが表現されていてしかるべきである。ところがある種の文言は、前者に見えるのに後者には欠けていることに気付く。

その一、ペルシア語訳Cの一節は、教皇側からのキリスト教へ改宗の勧めに対するグユクの回答となっている。その中でグユクは、教皇のことを

自ら賢ぶつてゐる(Khishtan râ dâna karâf)

と評している。対応するラテン語訳 c にはその種の文言はない。

その二、ペルシア語訳 D で、教皇がモンゴル軍の東ヨーロッパ侵攻を非難してきたのに対し、グユクは反論しているが、その際

あなた〔＝教皇〕のことはと同様にかれら〔ハンガリー国王ら〕もまた尊大であった(dili-kalân dâshra and 尊大な心を持っていた)。

と評している。右のくだりでは、グユクは、ハンガリー国王らに対し「神の命」に従わなかったとして非難の鋒先を向けるが、ついでに教皇書簡に見える教皇のことはについても「尊大である」としてあわせ批判している。対応するラテン語訳 d にはこの意味の文言はない。

その三、同じくペルシア語訳 D ではハンガリー国王らについて

かれらも傲慢に振舞った(gardan-kash kardâ and)。

ともいう。それに対してラテン語訳 d にはこの種の文言は見あたらない。

右のようにペルシア語訳には、教皇とハンガリー国王を批判するグユクの文言が三か所に見えているのに対して、ラテン語訳にはそれに対応する文言を全く欠いている。これは偶然の所産であろうか。かりにラテン語訳では対教皇・国王批判の文言が三箇所のうち一箇所だけ欠けているのであれば、偶然に欠落したとして理解することもできるが、揃って欠いているというのは、偶然ではあるまい。つまり意識的に行われたことと考えざるを得ない。その場合、二通りのケースを想定することができる。一つは、モンゴル語原典には教皇・ハンガリー国王を批判する文言はなかったが、ペルシア語訳の作成時にその種の文言を付加したことである。もう一つ

は、モンゴル語原典にもともと含まれていたその種の文言をペルシア語訳では忠実に訳し、当初のラテン語訳ではともかく、教皇に提示されたラテン語訳では削除されていることである。

いずれかといえば、後者の方が理解しやすい。前者ではとくにこれといった動機が考えられないが、後者については次のように考えることができるからである。つまりカルピニとしては、至高なる教皇に呈する書面において、教皇のことを露骨に「賢ぶっている」、「尊大である」などと悪くいう文言が散見することは、不謹慎・不穩当であると判断してその種の文言を削った、と。なおハンガリー国王についても、カルピニは実際に帰途に立ち寄っているほどであるから、教皇に準じた配慮をしたと考えるべきであろう。

3 ラテン語訳 f とペルシア語訳 F を比較すると、両者とも教皇に対し、グユクのもとへの呼び出しを行っている点では変わらない。ところが、ペルシア語訳 F では

今やあなたは、誠意をこめて『服します。お仕えます』といふべきである。……臣従の礼に (di-khadmat va bandagi) 出頭すべきである。

というように、グユクのもとに教皇が出てきて服属せよという、両者の間の上下関係が明白になっている。それに対して、ラテン語訳 f にはそれらに対応する文言が見あたらない。単に「私たちのもとに来なければならぬ」とあり、教皇がグユクのもとに出てくることを求めるに止まっている。臣下となる、服属するという意味までは読みとることができない。同じくペルシア語訳 B では

私たちのもとに伺候すべきである (di-khadmat-i mā b'yād)。

とあるが、それに対しラテン語訳 b の方は、単に「私たちのもとへ来るように」であり、やはり出てくることだ

けであってそこには教皇が臣下になるという意味合いはない。

当時のモンゴル側のたてまえでは、この書簡からも窺えるように、天より全地上の独占的統治権を与えられたとし、それを根拠に地上の諸国の君主に対して服属を求めていた。モンゴルの皇帝が上位にあり、諸国の君主が下位にあることは自明である。教皇に対しても同様であって対等の立場で交わることは全くありえない。従って両語訳のうち、はつきりと教皇を臣下としようとするペルシア語訳の方が、モンゴル語原典すなわちグユクの真意をよりの確に表わしていると見なければならぬ。

どうして現ラテン語訳にその趣旨の文言を欠いているのであろうか。おそらくカルピニとしては前項2でのべたように、教皇への批判的な文言を認めるわけには行かないのと同様に、教皇に対する配慮から、教皇を臣下扱にする表現ははばかられ、意識的に省いたのではないかと考えられる。

4 ペルシア語訳Gには、教皇がグユクの指示に従わなかった場合には、という意味で、「勅令(farman)に背いたならば」とある。それに対してラテン語訳gでは「忠告に耳を傾けないのであれば」とある。また教皇がグユクのもとに出てきたときに知らせようといっているものは、ペルシア語訳Bによると「勅令(farman)」であるが、ラテン語bでは「回答と意向」となっている。ラテン語訳では、表現上グユクから教皇に向けた「勅令」は存在しないのである。

カルピニの立場からすれば、「勅令」では、教皇が上位者からの命令を受けることになる。教皇が臣下となるという意味が表に出ないようにしたのと同様に、教皇に対する「勅令」はあってはならないと判断し、その文言を意識的に避け、「回答と意向」とか「忠告」のことに置き換えた。このような表現であれば、上位から下位

へ伝えられるものという意味は薄く、しかも文意を大きく損なうことのない。

5 臣下扱いに関連して次のような事例もある。ペルシア語訳 B・F では「服属」(in bandagi) になっているが、内容上それに対応するラテン語訳 b・f では、その代りに「和平」(pax) が使われている。

教皇からの書簡は、モンゴル軍の再度の侵攻を回避したいという動機から「和平」(pax) を申し入れて協同的友好的関係を取り結ぼうとするものであった。このことは自体、いずれが上位であり下位であるかということとは関係ない。それに対してペルシア語訳で使われている in bandagi には「服すること」、「従うこと」の意味はあっても、仲良くするという意味はなく、服属して臣下になることである。要するにペルシア語訳 B・F では、モンゴル皇帝を上位とし、教皇を下位とすることが明示されているのに対し、ラテン語訳 b・f ではその上下関係が抜きにされている。いずれかといえば、前項 3 でとりあげたラテン語訳 f とペルシア語訳 F の場合と同様の意味合いで、ペルシア語訳の方がモンゴル語原典に沿うものと考えられる。

「和平」は、当時のモンゴル側の受けとめ方では、旧稿でもとりあげたが、教皇側で考えていた単なる協同的友好的関係を結ぶことではありえず、モンゴルに対して戦いを挑むことなく、おとなしく臣下となることを意味した⁽¹⁶⁾。つまりペルシア語の in bandagi と同意であった。宮廷で返書の翻訳を行ったとき、内容を確認するためにラテン語訳からモンゴル語へ訳し戻させた。その際、かりに当初のラテン語訳に「和平」(pax) が使われていたとしても、モンゴル側から見た場合、「和平」は抵抗することなく臣下になることであったから、とくに問題は生じなかったであろう。

モンゴル側における「和平」の受けとめ方は別として、カルビニにとっては「服属」か「和平」か、は重大な

問題になる。かりに返書のラテン語訳のこのくだりで「服属」が使われていたと仮定すると、ラテン語訳bの一節は、教皇がモンゴル側に「服属しよう」と議したのちに使節を派遣したという意味になる。すなわち教皇は友好的関係を築きたいということが真意であったのにもかかわらず、曲解を招き、モンゴル皇帝に対して臣下になりたいという、教皇にとって思いもつかぬ屈辱的な申し入れをしたことになってしまふ。当初から「和平」とラテン語訳されていたのであれば問題ないが、もし当初の訳が「服属」あるいはその同義語であったとすると、カルピニとしてそのまま見過ごすことができず、「和平」に置き換えざるを得なかったに違いない。いずれにしてもラテン語訳における「和平」ではグユクの真意は正確に伝わらなかつたことになる。

6 ペルシア語訳cとラテン語訳cは、教皇がキリスト教への改宗を勧告してきたのに対するグユクの回答である。その内容に両語訳にはずれが認められる。

ペルシア語訳cの「その願い出は私たちには解らない」は、さきに言及した「自ら賢ぶっている」という、相手方に対する不快感を示す文言も伴っている。何故に教皇がこのような問題を提起してくるのか、その真意を理解することができないという、相手方の勧めそのものに対する疑念の表明である。それに対してラテン語訳cにおいては「どのようにしてそのことを行うべきか解らない」という。これは、改宗の手続き・方法が解らないという意味にもとれる。改宗の勧めに対して含みのある回答で、はっきり「諾」とはいつていないにしても、「否」ではない。門戸を開け、勧めに応じて一歩を踏み出しているとさえいえよう。

いずれかといえば、ペルシア語訳cの方がグユクの本当の意向に違いない。そのように理解した方が次項でとりあげる返書の後段（ペルシア語訳E・ラテン語訳e）において、グユクが教皇に対して、神のことがどうして

わかるのか、と反語を用いて相手のいうことを不可解としていることにも整合的である。ちなみに、のちにキリスト教徒であるという噂が流れたサルタク(パトウの子)の場合、ルブルク修道士によると、キリスト教徒を種族名と解し、そう呼ばれることを嫌ったという¹⁷。この場合、ペルシア語訳よりもラテン語訳に従った方が、教皇からの改宗の勧めに対してグユクが拒否的ではない対応をし、その勧めがむげに斥けられたのではないことになる。

7 さらにキリスト教に関してはペルシア語訳Eでは、教皇の書簡に「私はキリスト教徒であり」と記されているといい、それに対応するラテン語訳eでは、「あなた方、西方の人々はただ自分のみキリスト教徒であると信じ」とあつてやや詳しく記している。

教皇はモンゴル側への書簡で、イエス・キリストの贖罪について解説し、教皇の立場から、過ちの中にいる人々を真理の道へ教え導こうとしているのだといっている¹⁸。教皇の書簡にはペルシア語訳Eにある通りの文言があるわけではないが、グユクは、教皇が自分だけが神「天」とつながりのある尊者としてモンゴル人を見下していると理解し、反発したものと考えられる。ペルシア語訳のこのくだりは文字がうすれて判読できない個所があるので、厳密に比較することが困難である。ただ次のことは指摘することができる。

ペルシア語訳Eにおける「あなた」「私」「教皇は、文法上単数であるが、ラテン語訳eでは、教皇ではなく「あなた方、西方の人々」であり、それをうけて以下すべて二人称複数で処理している。従ってグユクが「どうして分かるか」と問いたただす相手は誰か、という問題を考えるとき、前者では教皇一人にしばられる。それに対して後者では西方の人々一般であり、やや漠然としたものになる。

8 ラテン語訳d、ペルシア語訳Dの最初の部分は、教皇がその書簡でモンゴル軍の東ヨーロッパ侵攻を非難してきたことを踏まえている。教皇は書簡で次のようにいつている。

男も女も年寄りも子供も容赦せず、あらゆる者に対して無差別の懲罰の剣をふるって猛り狂っている⁽¹⁹⁾。教皇の非難がどこまで正確にグユクに伝えられたかは知る由もないが、ラテン語訳dでは「ほかに住民、とくにキリスト教徒、わけてもポーランド人、モラヴィア人、ハンガリー人の大量殺戮に……」とあり、ペルシア語訳Dでは「マジヤールとキリスト教徒の地域をことごとく奪った」とある⁽²⁰⁾。前者では住民の大量殺戮であり、後者では領土の占拠である。

ラテン語訳dの方の文言は、ペリオがすでに指摘しているように⁽²¹⁾、ほぼ同じ表現がカルピニの報告書に見えている。そこではカルピニがモンゴル領に入って最初に出会ったモンゴル側官憲から使節としての任務を問われたとき、教皇がモンゴル軍の東ヨーロッパ侵攻、すなわち「住民、とくにキリスト教徒、わけてもハンガリー人、モラヴィア人、ポーランド人の殺害」に驚愕し、このような行動の中止を申し入れるため、自分たちを使節として派遣した、という趣旨のことを答えたという⁽²²⁾。

ペリオは、カルピニはその時のことを想起して右のような文言を用いた、という。十分にありうることである。つまりカルピニは伝えられたことはそのまま忠実に訳したというより自前の表現を用いたのである。どうしてそのようなことをしたか。次のことが考えられる。第一に、教皇が問題にしたのは住民をたくさん殺したことであって領土を占拠したことではないからである。第二に、「地域をことごとく奪った」という文言は、当時の西ヨーロッパ人が認識している、モンゴル軍の東ヨーロッパにおける行動には不適切と見えたからである。

思うに、モンゴル語原典ではモンゴル軍の行為について「殺戮」というマイナスのイメージを伴う文言は使われていなかったであろう。かりに使われていたとすれば、ペルシア語に訳すときに、それをわざわざ「地域をことごとく奪った」という別な表現に置き換えるということは考えにくい。「殺戮」は「殺戮」と訳したに違いない。つまりペルシア語訳Dはモンゴル語原典から忠実に翻訳したものと考えられる。

9 ラテン語訳d、ペルシア語訳Dにはもう一つ注意すべき箇所がある。両者の後半はいずれも、グユクは、教皇の東ヨーロッパ侵攻非難に対して反論を行い、「神の命」を受けてモンゴル軍は行動したと自らの正当性を主張する。ところがラテン語訳dではその前置きとして

ただし、この件について全く沈黙して避けて通った、と思われぬように、あなたに次のように答える。
というある種の申し開きの一文が挿入されている。これに対応する文言はペルシア語訳Dにはない。

のちにアルグンやガザン等が西欧側に発した、今日に伝わっているモンゴル語文書は威圧的あるいは直截的にメッセージを伝え、相手方の受けとめ方に気を使うような文言は絶えて見られない⁽²³⁾。グユクとしては、この反論こそ教皇に対してもっとも強調したい事柄であったはずであるから、強くアツピールしたいという姿勢を示す一文が挿入されているのであれば納得できる。しかし右の一文は、むしろその反対で弱腰であり消極的な姿勢を示している。モンゴル語原典の段階から含まれていたとは考えにくい。とすると、いかなる意図でこのような一文がここに挿入されることになったのであろうか。

あえて憶測すれば、モンゴル軍の軍事行動に関する教皇のことばを素直に受け入れることなく、むしろグユクが真つ向から反論していることは、カルピニとしては、教皇を臣下扱いするのと同様に、教皇の沽券にかかわる

こととして、不穏当であると判断し、右の一文を挿入することによっていささかでもその反論の衝撃を弱いものにしてしまったではなからうか。

10 ラテン語訳dでは、「神の文書」と、チンギス・カンとカガン(オゴデイ)の命令が並記され、同次元的なものとして扱われている。一方、ペルシア語訳Dではチンギス・カンとカガンは「神の命」の伝達者となっている。やはり「神」は超越的存在であり、チンギス・カンらはその配下である。この場合、改めてペルシア語訳と比較するまでもなく、同じラテン語訳のその続きを見れば、神が命令を発する者であり、モンゴルはその命のもとで行動する者と位置付けられているのだから、「神の文書」と皇帝の命令とに従わないという並列的記述は正確ではない。ただし、カルピニが意識的にこのように改めたとい概に断することはできない。

ペルシア語訳Fには「すべての領域を私たちに委ねた」とあるのに対し、ラテン語訳fには「全地上を滅ぼした」とある。当時のモンゴルが全地上の独占的統治権を掌握しているとして諸国に対して服属を迫っていた。右のペルシア語訳Fはそのことを標榜する文言である。モンゴル語原典にもこのように記されていたに違いない。一方ラテン語訳fは誤りである。当時のモンゴルがいかにユーラシアに領域を拡大しつつあったとはいえ、「全地上を滅ぼした」とまで極言しなかつたと考えられる⁽²⁴⁾。

なおラテン語訳fにある「またあなたが和平を容れ、私たちに自分の軍隊を引き渡そうとするのであれば」は、ペルシア語訳Fに対応する文言がないが、F全体の意味合いに影響がないといつてよい。一般論として、モンゴル側が新たに軍事行動を起こすときには、すでに服している国・地域から軍隊を提供させるが、単に軍隊の引渡しを要求することはしていない⁽²⁵⁾。その点から見ると、もともとモンゴル語原典に含まれていた文言かど

うか疑わしい。

おわりに

以上、グユクの教皇あて返書のラテン・ペルシア両語訳について相違するところを検討してきた。まとめると次の通りである。

文書の冒頭と末尾に関する限り、ラテン語訳もペルシア語訳並みにモンゴル流の書式のあとが窺えてもよいはずであるが、それが見受けられない(1)。教皇・ハンガリー国王を批判する文言を欠いていること(2)、教皇は臣下となるべきものとする表現を用いていないこと(3)、教皇に対し上位者からの命令となる「勅令」を別のことば「忠告」等に置き換えていること(4)などは、カルピニにとって教皇の体面を傷つけないように配慮して修正した結果であると理解することができる。また同じくラテン語訳においては、教皇からの改宗要請に対する回答も拒否的・反発的ではなく(6)、どうして神のことがわかるかと反語をもって責めるときも対象が教皇自身ではなく西方人一般になっており(7)、教皇から東ヨーロッパ侵犯非難に反論するときもその言い訳めいた一文を挿入している(9)。これら教皇への配慮のように見える諸点も、意識的に表現を工夫した結果であろう。そのほか、このグユクの返書を「確かな本物の書簡」である旨を標榜しているのも、東ヨーロッパ侵犯についての表現の違いも「地域をことごとく奪った」ではなく「殺戮」としている(8)のも単純なミスの種類ではないであろう。

検討の結果、両語訳のうちペルシア語訳には、とくに問題は見出せず、モンゴル語原典の記述に比較的忠実で

あると見受けられる。つまりグユクの教皇に対するメッセージを正しく伝えていると考えられる。それに対してラテン語訳は、右にあげたように、意識的に加筆修正したと推定される個所があり、モンゴル語原典より少々離れていると判断されるのである。

カルピニの報告を信ずれば、グユクの宮廷で作成されたラテン語訳はその場で繰り返し内容を確認しているのだから、それほどモンゴル語原典から逸脱しているはずがないのである。しかし実際にラテン語訳を吟味すると、加筆修正が施されていると判じざるを得ない。この矛盾はどう理解すればよいのであろうか。

この点は次のように考えたい。すなわち、当初、宮廷にあって内容を再三確認したというラテン語訳テキストは、忠実な訳であり、モンゴル語原典に近いものであった。あとからカルピニ、あるいは同行していたベネディクトゥスも加わり、そのテキストについてある種の配慮を行って加筆修正の手を加えた。それを以て教皇に提出した。今日に伝わっているテキストもすべてその修正したものである、と。従ってペルシア語訳との不一致は、カルピニが意識的に文面を改めたことに起因していると筆者は考える。

もともとグユクの返書は、モンゴルの皇帝が全地上の頂点に位置していることを前提としていたため、その忠実な訳では西ヨーロッパ・キリスト教世界の流儀に合わなかった。今日に伝わるラテン語訳は、カルピニ等により返書の趣旨を大きく変えることなく、その流儀のものに近づけようとして作成されたものといえよう。

右のように、グユクの返書のとげとげしさを取り除いたとしても、それはあくまでも教皇に対する配慮であって、対モンゴル関係の改善ということまで視野にいれていたとは思われない。ルブルク修道士の場合はその『旅行記』の末尾で、以後におけるモンゴルとの交渉について提案を行っているが、カルピニの場合はその種のこと

に言及せず、しきりにモンゴルの脅威を強調し、ヨーロッパのキリスト教世界における危機意識を高めようとして
いるからである。⁽²⁹⁾

註

- 1 K.-E. Lupprian, *Die Beziehungen der Päpste zu islamischen und mongolischen Herrschern im 13. Jahrhundert anhand ihres Briefwechsels*, Città del Vaticano, 1981, pp.141-149; Christopher Dawson, *The Mongol Mission*, London and N.Y., 1980, pp.73-76. 岩村忠『十三世紀東西交渉史序説』(三省堂 一九三九年) 一五二―一五三頁。
- 2 Giovanni di Pian di Carpine, *Storia dei Mongoli*, a cura di P. Daffina, C. Leonardi, M.C. Lungarotti, E.Menestò, L.Petech, Spoleto, 1989, p.317(IX-29). 本書の括弧内の数字は章と節を表す。
- 3 Giovanni di Pian di Carpine, pp.325-326(IX-41).
- 4 Giovanni di Pian di Carpine, pp.327-328(IX-44,45).
- 5 Igor de Rachewiltz, *Papal Envoys to the Great Khans*, London, 1971, p.103.
- 6 拙稿「モンゴル帝国の対西欧文書 グユク＝ハンの教皇あて書簡について」『歴史と地理』三五―号(山川出版社) 一九八四年 一〇―一頁。
- 7 Anastasius van den Wyngaert, *Sinica Franciscana*, Vol.I, Quaracchi-Firenze, 1929, pp.142-143; Dawson, pp.83-84. 護雅夫訳『蒙古中央アジア旅行記』(桃源社 一九七九年) 二二四―二二五頁。
- 8 Salimbene de Adam, *Chronica*, nuova edizione critica a cura di Giuseppe Scalia, Vol. I, Bari, 1966, pp.298-299.

6 Lupprian, p.182.

10 大正十二年八月二十一日(1923年8月21日) 大正十二年八月二十一日(1923年8月21日) 大正十二年八月二十一日(1923年8月21日)

o Dei fortitudo, omnium hominum imperator, magno pape literas certissimas atque veras.

q Habito consilio pro pace habenda nobiscum, tu papa et omnes Christiani nuntium tuum nobis transmisisti, sicut ab ipso audivimus et in tuis literis habebatur. Igitur si pacem nobiscum habere desideratis, tu papa et omnes reges et potentes pro pace diffinienda ad me venire nullo modo postponatis, et tunc nostram audietis responsionem pariter atque voluntatem.

u Tuarum continebat series litterarum, quod debemus baptizari et effici Christiani. Ad hoc breviter respondemus, quod hoc non intelligimus, qualiter hoc facere debeamus.

v Ad aliud, quod etiam in tuis literis habebatur, scilicet, quod miraris de tanta occisione hominum et maxime Christianorum et potissime Pollonorum, Moravorum et Ungarorum, tibi taliter respondemus, quod etiam hoc non intelligimus. Veruntamen ne hoc sub silentio omnimodo transire videamur, taliter tibi dicimus respondendum: Quia littere dei et precepto Cyngis-Chan et Chan non obediunt et magnum consilium habentes nuncios occiderunt, propterea deus eos delere precepit et in manibus nostris tradidit. Alioquin, quod si deus non fecisset homo homini quid facere potuisset?

o Sed vos homines occidentis solos vos Christianos esse creditis et alios despicitis. Sed quomodo scire potestis, cui deus suam gratiam conferre dignetur?

f Nos autem deum adorando in fortitudine dei ab oriente usque in occidentem delevimus omnem terram, et si hec dei fortitudo non esset, homines quid facere potuissent? Vos autem, si pacem suscipitis et vestras nobis vultis tradere fortitudines, tu papa cum potentibus Christianis ad me venire pro pace facienda nullo modo differatis, et tunc sciemus, quod vultis pacem habere nobiscum.

g Si vero dei et nostris litteris non crederitis et consilium non audieritis, ut ad nos veniatis, tunc pro certo sciemus, quod guerram habere vultis nobiscum. Post hac quid futurum sit nos nescimus, solus deus novit.

h Cyngis-Chan primus Imperator. Secundus Ochoday-Chan. Tertius Cuinch-Chan.

最後の一行は、一種の注記と思われる。ルブリヤン編テキストにはないが、ヘネティックウスとサリムベネには見えるので、念のためそれを引用した。

リナン語訳テキストを訳したものは、Dawson, pp. 83-84; Jean de Plan Carpin, *Histoire des Mongols*, tr. P. C. Schmitt, Paris, 1961, pp.135-136; Placid Hermann (tr.), *XIIIth Century Chronicles*, Chicago, 1961, pp.220-221 等に収められている。

- 11 ヘルンア語訳かぶの註訳は、Paul Pelliot, “Les Mongols et la papauté,” *Revue de l’Orient chrétien*, 23, 1923, pp.6-30 所収のテキストに拠り、Pelliot の仏語訳、J. A. Boyle の英語訳 (L. de Rachewitz, pp.213-214) のほか、以下の邦訳を参考にした。岩村忍『十三世紀東西交渉史序説』、三省堂、一九三九年、一七五、一七六頁、ドーンン著・佐口透訳註『モンゴル帝国史 2』、平凡社、一九六八年、二四二、二四四頁、川床睦夫編『シンボジウム「イスラームとモンゴル」』(中近東文化センター研究会報告 No.10) 中近東文化センター、一九八九年、北

川誠一訳、二七八～二七九頁。

12 冒頭の部分は、とりあえずこのように訳したが、とくに第二句目は従来から諸説があつて解釈が分かれている個所である。A. Mostert et F. H. Cleaves, "Trois documents mongols des Archives secrètes vaticanes," *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 15, 1952, pp.485-495; G. Doerfer, *Türkische und mongolische Elemente im Neupersischen*, III, Wiesbaden, 1967, pp.633-637; Ide Rachewiltz, "Qan, Q'an and the seal of Güyük," Sagaster and Weiers(eds.), *Documenta Barbarorum*, Wiesbaden, 1984, pp.274-276; 松川節『13 14世紀モンゴル時代発令文の研究』(松香堂刊)、一八九～一九一頁を参照。

13 松川節「大元ウルス命令文の書式」『待兼山論叢(史学篇)』二九、一九九五年、三七～四〇頁、同、前掲書、とくに一五一～一五四頁参照。

14 どうしてこのような文言がここに挿入されたのであろうか。敢えて憶測すると、次のようなことが考えられる。

モンゴルから帰還した当初のカルビニの報告書全八章は、自分自身の行動についての記述を欠き、それを読んだ読者から、本当にモンゴルへ行ったのかという疑いの目で見られた。そのために第九章として自らの旅行記録を加え、自分たちがモンゴルへ行ったことを知っている証人として、途中で出会ったヨーロッパ人の名前を挙げている。さらにプロローグにも次のような一節を新たに書き加えている。

しかしあなた方読者には知られていないことから、私たちが報告しているとしても、だからといって、私たちが嘘つきだと言うのはおかしい。私たちは自分自身の目でみたこと、信頼の置ける人から

確かなこととして聞いたことを報告しているのである。人がよいことをしたがために他人から悪くいわれるのは、本当に酷なことである (Giovanni di Pian di Carpine, p.228, prologus-41)

この記述からも、カルピニらが「嘘つき」といわれ不評であったことが窺われる(拙稿「カルピニのモンゴル報告に関する覚書」、『帝京史学』第八号、一九九三年、九〇―一〇頁参照)。このような状況に置かれていたから、カルピニが託されて持ち帰ったグククの返書についても、ひとから本物かどうか疑われたり、カルピニ自身も疑われているのではないかと危惧したりすることがあったとしても不思議ではない。さきの「確かな本物の書簡」という文言は、カルピニがそのような疑いに対し、あるいはあらかじめ先手を打って、書簡が真正正銘のものであることを強調しようとしてあとから挿入したのではなからうか。

15 シモン修道士の伝える、同じころのバイジュ・ノヤンの教皇あて返書では、末尾にしたためたの場所と日付が記されている。Simon de Saint-Quentin, *Histoire des Tortures*, ed., Jean Richard, Paris, 1965, p.115. なお、ペリオは、モンゴル語原典が草稿で日付が未記入であったと見ている(Pelliot, p.23, n.10)

16 前掲、註14拙稿、五―六頁。

17 Wynaert, p.205(XVI:5); Peter Jackson (ed.), *The mission of Friar William of Rubruck*, London, 1990, p.120.

18 一二四五年三月五日付け教皇書簡、Lupprian, pp.142-145; Dawson, pp.73-75.

19 なお、本文に引用した個所の続きでは「……今後はこの種の攻撃を、とりわけキリスト教徒の迫害を決して行わないこと、かくも夥しく、かくも極悪非道の罪を犯したからには、疑いもなくあなた方のそのような挑発により引き起した神の怒りを、しかるべき贖罪により鎮めるべし。」(Lupprian, pp.147-149; Dawson, pp.75-

76. 岩村忍『十三世紀東西交渉史序説』三省堂刊、一九三九年、一五二―一五三頁)といっている。
- 20 ラテン語訳dもペルシア語訳Dも、この箇所は直接話法的に記され、教皇の書簡のことを引用しているかのよう記述しているが、実際の教皇の書簡では、モンゴル軍侵攻の被害を蒙った人々として「キリスト教徒およびその他の人民」と記しているだけで、具体的な種族名を挙げていない。前註19の文献参照。
- 21 Pelliot, p.21, n.2.
- 22 Carpine/Menesto, pp.306-307(IX:8): “quod mirabatur tanta occisione hominum, et maxime Christianorum et potissime Hungarorum, Moravorum, Polonorum qui sunt ei subditi, que per Tartaros facta est,”
- 23 Mostaert et Cleaves, op.cit.: Mostaert et Cleaves, *Les lettres de 1289 et 1305 des ikhan Arā un et Ojeyti à Philippe le Bel*, Cambridge, Mass., 1963; 佐口透『モンゴル帝国と西洋』、平凡社、一九七〇年、一九七―二一〇頁。
- 24 筆者の憶測では、旧稿でも言及したが、当初のラテン語訳は地上を“delegare”(委ねる)と正しく記されていた。のちに推敲されるうちに、字形が似ていて意味も前後の文脈の中でとくに不自然さを感じさせない“deleere”(滅ぼす)に取り換えられたのではないかと思う。従って意識的に変えたのではあるまい。
- 25 引渡しをもとめたものが「軍隊」ではなく「要塞」(Dawson, p.83,では“fortresses”と訳す)だったとしても、そのような例はない。
- 26 前掲、註14拙稿、一七―二四頁参照。
- 付記 本稿を草するにあたり広島修道大学の宇野伸浩氏より貴重なご教示を頂いた。厚く謝意を表したい。